
ロボットのユメ

凶華

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ロボットのコメ

【Zコード】

Z9493E

【作者名】

凶華

【あらすじ】

人間がコメを見るよつとロボットもコメを見る・・・

人は、ユメといつものを見る。
・・・そして、ロボットも・・・

「機能停止」

その一言で、私達ロボットは動かなくなる。次に、「機能再生」といわれるまで。

その間、ロボットは人間と同じようユメを見る。そして、そのユメは人それぞれ違うユメを見るように、ロボットもそれぞれ違う。しかし、そのユメを覚えることはできない・・・

私の今日のユメ

「ねえ、そこのロボットちょっと来てーーー」の荷物重いから持つてよ。」

『かしこまりました、奥様。』

そういうて、私は奥様の荷物を持つと、奥様の後に続いて家の中に入った。

そして、言われた場所にカバンを下ろすと、この家の子供達が私の周りに集まってきた。そして口々に、何か言い始めた。しかし、私には奥様以外の言葉は理解できないようプログラムされている。

だから、子供達が何を言つてはいるのか私には理解できず、その場にボーッと立つていた。しばらくすると、子供達が飽きて他のところへ行つてしまつた。本当は追いかけて行きたかったが、私は追いかけもせず、荷物を置いた場所から動かないでいた。いや、動けなかつた。そうプログラムされていたから・・・

カチリ

ロボットが起動し始めた。

何故なら、家の敷地内に何か入つてきたから。

家に入つてきたのは、この家の奥様が乗つてはいる車だつた。その車は、駐車場に止まると勢いよく子供達が出てきた。

後から出てきた奥様は、車に詰まれてはいる大量の荷物をチラリと見ると、大きな声で

「機能再生」

と言い、一呼吸あけたあと、

「ねえ、そこのロボットちょっと来て――この荷物重いから持つてよ。」

と言つた・・・

（後書き）

意味が分からなかつたら、『勘弁を（笑）

私も、書いてこぬつちな分からなくなつていつたやつたんで（汗）

読んでいただいた方、ありがとうございました

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9493e/>

ロボットのユメ

2010年11月23日05時48分発行